

海洋機構 冬季南極深海で世界初 温度・塩分を連続観測

海洋研究開発機構は、鶴見精機（横浜市鶴見区、立川道彦社長、045・521・5252）と共同開発した無人観測機を使い、海面が氷に覆

られる冬季の南極で、水深4000メートルまでの深海の温度と塩分濃度の連続観測に世界で初めて成功した。観測に成功した南極アデリー海岸沖の深海の海水温度の変化は、太平洋の深海水温上昇の原因と見られている。これまで連続して観測できない機器がなく、事実上の

観測空白域となっていた。

2012年12月から投入していた無人観測機「ディープニンジャ」が観測に成功した。同機は自動で浮き沈みを繰り返して、海面に出た時に衛星通信で海水の温度と塩分濃度のデータを送信する。上昇時に上部に氷がある場合は、上昇を止めて再び沈降する。投入後は定期的なデータ送信が続いていたが、氷に覆われた13年6月ころからデータ送信が停止。その間も氷の下で観測は続き、氷が少なくなった11月末に浮上、データ送信した。

これまで観測機器の性能の点で限界だった冬季南極の深海観測に成功したことにより、1年を通じた観測ができ、地球規模での気候変動研究の基礎データとして活用される。

海洋機構は今後も長期観測を続ける。得たデータについては、日本を含む世界の先進各国による海洋観測の国際プロジェクト「アルゴ計画」を通じてインターネットで公開される予定だ。